

ジャーナリズム・メディア演習Ⅰ

2023

整理番号 No.	科 目 名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
401	ジャーナリズム・メディア演習Ⅰ(齊藤泰治)	春学期	JDP 3年以上・2単位 EDP 2年以上・2単位	齊藤 泰治
算入科目区分 Course Category				
JDP 2019年度以降入学者		演習科目 > 上級・専門科目		
JDP 2014~2018年度入学者		グローバル科目 > 演習 または 所属学科目(政治/経済/国際政治経済) > 専門演習 ※演習科目の所定4単位の要件も満たす		
EDP Entered in or after 2019		Seminars > Advanced/ Specialized Courses		
EDP Entered in or before 2018		Workshops & Seminars (Required Credits)		

副 題 Subtitle

ジャーナリズムの視点からの中中国研究Ⅰ

授業概要 Course Outline

本演習は「ジャーナリズム・メディア演習」として設置されており、中国に関してジャーナリズム的な視点から研究することを目的とする。具体的には、中国に関する報道を通して中国を研究するという側面と、ジャーナリズム、報道について研究するという側面を含む。このような研究を行うためには、中国の政治、社会、文化、歴史をはじめとする諸分野に対する旺盛な関心と知識が必要であると同時に、グローバルな視点からジャーナリズム、報道に関する研究を行うことが必要となる。基礎となる文献を読み、具体的な報道事例等を通してジャーナリズム的視点から中国研究を進めるための方法論を組み立てていく。

授業の到達目標 Objectives

これまでの内外の研究成果を踏まえ、中国報道に関して現状分析のための基礎力を身につけることによって、ジャーナリズムの視点から中国を研究することができるようになる。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

一週間単位で中国に関する報道、ニュースを調べ、関連する資料によって理解を深めて演習に臨むことを基本とする。具体的な内容については初回のオリエンテーションで説明する。

授業計画 Course Schedule

第1回目はオリエンテーションを行う。第2、3回は資料について説明する。第4回以降は資料を読むと同時に、受講者に研究発表をしてもらう。最終回は全体のまとめを行う。

教 科 書 Textbooks

特定の教科書は使用しない。

参考文献 Reference Books

隨時紹介する。

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	0%	試験は行わない。
レポート Papers	70%	レポートのテーマを最初から計画的に考え、提出期限までに提出するものとする。
平常点評価 Class Participation	30%	出席するだけでなく、授業への積極的貢献をもとに評価を行う。短いレポートを隨時書いてもらう。コミュニケーションを大切にしてほしい。
その他 Others	0%	とくになし。

備考・関連URL
Note・URL

ジャーナリズム・メディア演習 I

2023

整理番号 No.	科 目 名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
402	ジャーナリズム・メディア演習 I (瀬川至朗)	春学期	JDP 3年以上・2単位 EDP 2年以上・2単位	瀬川 至朗
算入科目区分 Course Category				
JDP 2019年度以降入学者		演習科目 > 上級・専門科目		
JDP 2014~2018年度入学者		グローバル科目 > 演習 または 所属学科目(政治/経済/国際政治経済) > 専門演習 ※演習科目の所定4単位の要件も満たす		
EDP Entered in or after 2019		Seminars > Advanced/ Specialized Courses		
EDP Entered in or before 2018		Workshops & Seminars (Required Credits)		

副 題 Subtitle

次世代ジャーナリズムの研究と実践 (ファクトチェック、オシント調査報道、ルポ、映像作品)

授業概要 Course Outline

【演習全体のねらい】

ジャーナリズムは何のためにあるのか。Kovachらは「ジャーナリズムの第一の目的は、市民にたいして自由と自治に必要な情報を伝えることだ」(The Elements of Journalism)と指摘する。市民の「知る権利」に応え、成熟したな議論に必要な真実に迫り、伝えていくことがジャーナリズムの役割である。しかし現実には、政府のプロパガンダを無批判に伝える「発表報道」や視聴率重視の報道がメディア不信を醸成する一因になっている。ネットが主流となり、「フェイクニュース」をはじめとする偽情報・語情報も深刻な問題となっている。信頼できる、新しいジャーナリズムのあり方が模索されている。

【演習 I ~IVでおこなうこと】

本演習では、基本的な文献講読を通じ、デジタル時代のジャーナリズムの機能と課題について理解を深め、新しいジャーナリズムの形(ファクトチェックなど)について考える、また、ジャーナリズムの実践として、さまざまな社会問題について受講生が能動的な問題意識をもって調査・取材に取り組む力を身につけ、卒業論文(卒業作品)として、調査取材記事やデータ分析記事、ルポ、映像作品の制作をめざす。人数は限られるが、論文形式をめざす学生も受けいれる。

◎ファクトチェックとデジタル・ジャーナリズムの実習

SNSの投稿や政治家などの真偽不明の情報を検証するファクトチェックや、デジタル時代に必要なスキルとして、オープンソースを活用するオシント調査報道やデータ・ジャーナリズムの手法を学ぶ。

◎ゼミウェブマガジンWaseggへの掲載

各演習で制作した記事・映像作品やファクトチェック記事はゼミ生のウェブマガジン『Wasegg』(<http://wasegg.com>)に随時掲載する。

【演習 I の概要】

文献講読と実習の両面で、ジャーナリズムに関する基礎力を養う。

文献講読では、ジャーナリズムの機能と課題について理論的に学ぶとともに、「フェイクニュース」の実情やファクトチェック活動についても理解を深める。

実習では、取材方法の基礎を学び、地域や大学、人物に焦点をあてた記事を取材・制作する。

また、デジタル・スキルの基礎を習得し、ネット情報や政治言説などを対象にファクトチェックの実践をおこなう。

時間的に余裕があれば、演習IIでのグループ取材を想定し、取材テーマにしたい具体的な社会問題について調査し、取材の準備を進める。

【※ファクトチェック関係は主にサブゼミでおこなう予定】

＜参考：社会問題の例示＞

社会問題として、以下のようなものを例示できる=新型コロナ感染症と社会、格差と貧困、ダイバーシティ、LGBTQ、政治とメディア、戦争とメディア、偽情報・誤情報、ファクトチェック、若者と政治・選挙、医療介護、社会の分断、差別と偏見、人口減社会、外国人と日本社会、原発問題、震災復興、沖縄基地問題、自然災害、気候変動、持続可能な社会など(あくまで例示であり、これらにこだわる必要はない)

授業の到達目標 Objectives

デジタル時代のジャーナリズムの機能と課題について理論的に理解する。また、自ら能動的な問題意識をもって問題に迫り、根拠をもって市民に伝えるコミュニケーション力を取材実習を通じて習得するとともに、情報の真偽を検証するためのデジタルスキルを身につけ、デジタル時代のジャーナリストの基礎力を養う。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

適宜、授業内で担当教員より指示する

授業計画 Course Schedule

【ゼミ】

- 1週 ガイダンス
2週 取材・記事作成について講義（取材マニュアルなど）
3～5週 地域・人物もの企画案の報告と議論
6週 写真実習
7～10週 文献購読
ビル・コバッチャ『ジャーナリズムの原則』日本経済評論社 2011.（原著”The Elements of Journalism”）を予定
11-14週 地域・人物もの企画記事の報告・議論 記事の完成

【サブゼミ】

- 1週 ファクトチェックとは（講義）
2-5週 ファクトチェックの手法の学習（過去のファクトチェック記事やFIJのClaimMonitorなどを利用）
6-9週 デジタルスキルの学習／メディア人セミナー
10-14週 ファクトチェック実践 ファクトチェック記事の完成
2023年9月中旬（予定） ゼミ合宿（訪問先での取材実習を含む研修旅行）を予定

※本授業は、新型コロナウイルス感染防止策を講じたうえで、対面授業を基本とします。感染の急拡大期には一時的なオンラインへの移行など柔軟に対応します。

教科書 Textbooks

演習で講読する文献は初回のガイダンスまでに指示する。

参考文献 Reference Books

- B. Kovach & T. Rosenstiel "The Elements of Journalism" 3rd Edition, Three River Press, 2014 (邦訳『ジャーナリズムの原則』加藤岳文／斎藤邦泰訳・日本経済評論社)
B. Kovach & T. Rosenstiel "Blur: How to Know What's True in the Age of Information Overload" Bloomsbury Publishing plc, 2011 (邦訳『インテリジェンス・ジャーナリズム』奥村信幸訳・ミネルヴァ書房)
C. Silverman, "Verification Handbook for Investigative Reporting." European Journalism Centre.
C. Silverman, "Verification Handbook for Disinformation and Media Manipulation." European Journalism Centre. 2020.
E・パリサー 『フィルターバブル——インターネットが隠していること』 井口耕二訳・早川書房
W. リップマン 『世論（上）（下）』 掛川トミ子訳・岩波文庫
『山本美香最終講義 ザ・ミッション 戦場からの問い』 早稲田大学出版部
瀬川至朗 『科学報道の真相——ジャーナリズムとマスメディア共同体』 ちくま新書

評価方法
Evaluation

	割 合 (%) Percent (%)	評 価 基 準 Description
試 験 Examinations	%	
レポート Papers	50%	期末レポート、学期中に提出してもらう企画記事、ファクトチェック記事
平常点評価 Class Participation	50%	ゼミへの出席、ゼミでの発表とレジュメ、他の受講生の発表への質疑などを総合的に評価する。
そ の 他 Others	%	

備考・関連URL
Note・URL

ゼミ合宿（研修旅行）を予定しています（2016年9月＝金沢、2017年9月＝沖縄、2018年9月＝福島、2019年9月＝沖縄、2020年・21年9月＝新型コロナ感染防止のため中止）。実施する場合は、ゼミ活動の一環として全員参加を原則としています。

ジャーナリズム・メディア演習Ⅰ

2023

整理番号 No.	科 目 名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
403	ジャーナリズム・メディア演習Ⅰ(高橋恭子)	春学期	JDP 3年以上・2単位 EDP 2年以上・2単位	高橋 恭子
算入科目区分 Course Category				
JDP 2019年度以降入学者		演習科目 > 上級・専門科目		
JDP 2014~2018年度入学者		グローバル科目 > 演習 または 所属学科目(政治/経済/国際政治経済) > 専門演習 ※演習科目の所定4単位の要件も満たす		
EDP Entered in or after 2019		Seminars > Advanced/ Specialized Courses		
EDP Entered in or before 2018		Workshops & Seminars (Required Credits)		

副 題 Subtitle

ジャーナリズムの現在と未来～映像ジャーナリズムを中心に

授業概要 Course Outline

私たちは、インターネットによって新たなコミュニケーションの場や機会を生み出し、情報収集することで知識を蓄積することができる。しかし、同時にネット上にはデマ、偽情報、流言が飛び交い、現代は真実が犠牲にある「ポスト真実の時代」といわれる。フェイクニュースに立ち向かう対抗策としてのメディア・リテラシーが注目されているが、多くの場合、メディアの倫理的な活用という意味でとらえられ、メディアの問題を市民の側から批判的かつ多角的に見る視点が欠如している。

本ゼミでは、メディア・リテラシーに、情報の真偽を見分ける「ニュース・リテラシー」や「ファクトチェック」といった新たなリテラシーの要素を複合させ、デジタル時代に相応しいワークショップを再構築すると同時に、映像メディアに見られる問題を提起し、映像メディアの現在、未来を検証する。授業は理論と実践の両面からジャーナリズムにアプローチするクリティカルからクリエイティブな流れをデザインする。具体的には、1. 講義と討論「映像メディア検証」、2. 学生によるメディア分析、3. 学生による取材・調査・映像撮影 4. 次世代ジャーナリズム関連書の購読、5. 成果物（文章、映像、写真、Web等）の制作・発表・評価から構成する。映像メディア分析では、メディア・リテラシー研究の分析手法を採用し、I メディア・テクスト、II オーディエンス、III テクストの生産・制作の3つの領域から考察する。

本演習では、主体的に授業に参加し、自らの意見を根拠をもって主張し、かつ意見交流をできる基礎を形成することを目的とする。

授業の到達目標 Objectives

メディアをクリティカルに分析する力とメディアを創造する実践的な力を養う。

実践はドキュメンタリー、フォトストーリー、Webコンテンツ、ソーシャルメディアを利用したコンテンツなど個々の知識と能力によって選択する

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

文献やニュース番組分析を通して、メディアをクリティカル分析する力を養う。この経験から、自らテーマを設定し、取材活動を行う。取材した内容は、ゼミのサイトなどで原稿や映像として発表する。

授業計画 Course Schedule

授業の方向性とオリエンテーション/ニュース分析/購読
ニュース分析/購読
ニュース分析/エッセイ ブレーンストーミング
ニュース分析の質的分析のための課題提示/購読
ニュース分析/購読
エッセイ第一稿発表
エッセイ 第二稿提出
ニュース分析/購読
プロジェクトブレーンストーミング
ワークショップ「ジェンダーの視点からニュースを見る」
課題発表 ニュース分析/購読

プロジェクト中間報告
ニュース・リテラシーワークショップ
フェイク分析/購読
ニュース分析発表/購読
プロジェクト発表

教科書
Textbooks

そのつど、印刷物を配布する

参考文献
Reference Books

「ジャーナリズムの原則」ビル・コバッチ、トム・ローゼンスティール 日本経済評論社
「インテリジェンス・ジャーナリズム」ビル・コバッチ、トム・ローゼンスティール ミネルヴァ出版
「フェイクニュースを科学する」笹原和俊 化学同人
「 фактотчекとは何か」立岩陽一郎、楊井人文 岩波ブックレット

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examinations	%	
レポート Papers	%	
平常点評価 Class Participation	%	
その他 Others	100%	試験: 0%なし レポート: 25% メディア分析 メディアリテラシーの理解度。 平常点評価: 50%出席と授業の主体的参加度。 その他: 25%コンテンツのプランニングと実践力。

備考・関連URL
Note・URL

映像制作のための技術を身につけたい場合は、グローバルエデュケーションセンター開講の副専攻「ジャーナリズムとメディア表現」の「映像芸術表現」「制作プロジェクト研究」の映像系科目を受講することをお薦めします。

関連URL:

ゼミサイトは「Action! from critical to creative」
<http://www.waseda.jp/sem-kytwaseda/>
facebook 「高橋恭子ゼミ」

ゼミ紹介

<https://www.waseda.jp/fpse/pse/news/2017/12/11/8269/>

本年度は原則、対面で実施する。コロナウィルスの感染拡大が認められた際は、リアルタイムによるオンライン授業とオンデマンドに移行する。

原則、3、4年合同で木曜日の4、5時限に実施します。卒論や3年生のプロジェクトのまとめ時期には別に実施することもあります。

ジャーナリズム・メディア演習Ⅰ

2023

整理番号 No.	科 目 名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
404	ジャーナリズム・メディア演習Ⅰ(土屋礼子)	春学期	JDP 3年以上・2単位 EDP 2年以上・2単位	土屋 礼子
算入科目区分 Course Category				
JDP 2019年度以降入学者		演習科目 > 上級・専門科目		
JDP 2014~2018年度入学者		グローバル科目 > 演習 または 所属学科目(政治/経済/国際政治経済) > 専門演習 ※演習科目の所定4単位の要件も満たす		
EDP Entered in or after 2019		Seminars > Advanced/ Specialized Courses		
EDP Entered in or before 2018		Workshops & Seminars (Required Credits)		

副 題 Subtitle

近現代史におけるメディアとプロパガンダ、およびジャーナリズム

授業概要 Course Outline

近現代の日本および欧米におけるメディアとジャーナリズムの発達の経緯を理解し、検閲制度をはじめとする政府との関係、政治家や政府機関などとジャーナリズムおよびメディアとの関係、世論を動かすためのプロパガンダという思想がどのように展開してきたかを、実証的に学び議論する。また、実際にメディアやジャーナリズムに関係した人々にインタビュー調査や資料探索を行ない、メディアの歴史や、メディアに対するアプローチのしかた、メディアの分析のしかたに関する知見を深め、年度末には各自が卒論テーマを見いだせるよう研究をすすめる。なお、2023年度は、ブロック紙記者のOBにインタビュー調査する予定である。

授業の到達目標 Objectives

メディアとジャーナリズムに関する基本的知識を学ぶだけでなく、それを活用し、自分で資料を探索し読み解き、思考する能力を養う。また実際にインタビュー調査を行う力量を育成する。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

適宜、授業内で担当教員より指示する

授業計画 Course Schedule

第一回：オリエンテーション
第二回～第七回：英語文献講読
第八回～第十三回：日本語文献講読
第十四回：インタビュー調査の目的及び計画の説明と準備

教 科 書 Textbooks

初回の授業には、藤竹暁編著『図説 日本のメディア』(NHKブックス、2018年)を読んだ上で、持参すること。

その次からは、開講時に配布する英文テキストを読む。
以降は授業中に指示する。

参考文献 Reference Books

関連文献については、隨時紹介する。

評価方法
Evaluation

	割 合 (%) Percent (%)	評 価 基 準 Description
試 験 Examinations	%	
レポート Papers	30%	二回ほどレポートを指示する。
平常点評価 Class Participation	70%	英語文献及び日本語文献の講読の際に行う報告、発言、議論を評価対象とする。
そ の 他 Others	%	

備考・関連URL
Note・URL

基本的には教室での対面講義を行う。積極的な質疑応答、議論を評価します。

ジャーナリズム・メディア演習 I

2023

整理番号 No.	科 目 名 Course Title	学期 Term	配当年次・単位 Eligible Year・Credits	担当教員 Instructor
405	ジャーナリズム・メディア演習 I (中村理)	春学期	JDP 3年以上・2単位 EDP 2年以上・2単位	中村 理
算入科目区分 Course Category				
JDP 2019年度以降入学者		演習科目 > 上級・専門科目		
JDP 2014~2018年度入学者		グローバル科目 > 演習 または 所属学科目(政治/経済/国際政治経済) > 専門演習 ※演習科目の所定4単位の要件も満たす		
EDP Entered in or after 2019		Seminars > Advanced/ Specialized Courses		
EDP Entered in or before 2018		Workshops & Seminars (Required Credits)		

副 題 Subtitle

内容分析を中心に用いたメディア・メッセージの実証研究（演習I：ヒューマン・コーディング／演習II：コンピュータ・コーディング）

授業概要 Course Outline

本演習は、内容分析という手法を使ってメディアの送り出す情報を実証的に分析することを目標にしています。

あなたはメディアを通じて得る情報に疑問を持ったことはないでしょうか。たとえば、原発報道はどういった経緯を経て今にいたっているのか、経済問題に報道は一貫した姿勢で対処してきたのか、CMやドラマにあらわれるジェンダー観は時代とともにどう変わってきたのか、などです。こうした疑問のもととなる情報（メッセージ）は、日々、新聞やテレビ、インターネットなどから大量に発信されています。そこにはどういった特徴や傾向があり、その背後には発信者のどういった情報選択があるものでしょうか。

本演習では、こうしたあなたの興味を分析していきます。分析の主題は政治でもジェンダーでも文化でも構いません。また、対象は報道でも映画でもコマーシャルでもSNSでも構いません。マス・コミュニケーション上あるいはジャーナリズム上の興味をもって、メディアに流れる情報をぜひ実証的に・科学的に分析してみましょう！

そのために、本演習では内容分析という手法を学びます。内容分析とは、単に内容を分析するという抽象的なものを指すのではありません。どういう手順で何をするかが決まっている、ある科学的な分析手法の名称なのです。この内容分析では、メッセージの内容をコード（記号）化して分析します。たとえば、議題・争点を「政局」「政策」に分類したり、登場人物を「政治家」や「専門家」といったコードに分類したり、論調を「ポジティブ」や「ネガティブ」といったコードに分類したり、です。そして、それらコードが何回あらわれるかを数えるなどし、発信される情報を量にして、情報の特徴をとらえていきます。こうすることで、流れている情報を客観的に扱えるようにします。

コード化には主に2つの技法があります。当演習では（1）学部3年次前半（春学期）にヒューマン・コーディングという技法を、（2）後半（秋学期）にコンピュータ・コーディングという技法を学び、4年次に卒業研究に取りくみます。

内容分析は、マス・コミュニケーションやジャーナリズム研究によく使われるほか、企業が顧客のクチコミを分析してマーケティングに役立てることにも利用されています。この手法を使って、ジャーナリズム、マス・コミュニケーション、あるいはメディア上の課題やあなたの疑問に挑みましょう。あなたの興味とやる気を、ぜひ具体的な形にしてみてください！

この演習では、一つの主題や目標を複数の受講者が共有し、チームで議論をしながら協調的に作業を進める活動を主体にしています。これにより、専門性を深めるだけでなく、チームの中で目標を共有し、困難に面したときに助け合ったり責任を分担したりして解決する経験をつんでみましょう。この経験は、将来、あなたが専門課程で研究を行ったり、職場で同僚と協調的に仕事をしたりする際に必ず役に立ちます。そして、簡単なようでなかなかそうではない実証的な調査・研究というものをぜひ経験してください！ これは大学にいればこそできるものです。

授業の到達目標 Objectives

- ・実証的な調査の流れ（問題意識～仮説～調査計画～実施～結果の整理～分析～考察～結論）を経験し、その要領を学ぶ。
- ・分析法を習得する。（演習Iはヒューマン・コーディング、演習IIはコンピュータ・コーディング）
- ・分析力を高める。
- ・マス・コミュニケーション、ジャーナリズム、メディア上のなんらかの課題に建設的に言及する。
- ・チーム内でコミュニケーションをとりながら協調的に作業をし、課題を解決する。
- ・以上を通じ、特定の専門知識だけでなく、社会に出た際の汎用的なスキルを身につける。

事前・事後学習の内容 Preparation and Review

当演習は反転授業を取り入れています。授業後は次の授業に向けた準備を各自がおこない、教室では時間と場所をチームのメンバーと共有するメリットを活かして協調学習やチームワークに取りくみます。たとえば、論文を読む際には事前に読んだり演習問題に取り組んだりし、当日に教室で発表と議論をします。チームワークではその日までの進捗に応じて次までの目標をチームが自ら立て、それを持ちよって次の授業をすすめます。

授業計画 Course Schedule

- 第1回：オリエンテーション
第2回：内容分析とは？ I：研究論文を読む（プレ演習の論文読解の続き）／内容分析のデザインと実践1：調査主題を提案する・決める
第3回：手法を学ぶ1：内容分析の歴史
第4回：内容分析のデザインと実践2（チームワーク）：問い合わせをたてる・対象をきめる・変数とカテゴリを設定する
第5回：手法を学ぶ2：内容分析の設計
第6回：内容分析のデザインと実践3（チームワーク）：テスト・コーディングを始める
第7回：手法を学ぶ3：サンプリング
第8回：内容分析のデザインと実践4（チームワーク）：テスト・コーディングをもとに計画を再検討する
第9回：手法を学ぶ4：ヒューマン・コーディング
第10回：内容分析のデザインと実践5a（チームワーク）：コーディング・マニュアルを完成させる I.
第11回：内容分析のデザインと実践5b（チームワーク）：コーディング・マニュアルを完成させる II.
第12回：手法を学ぶ5：信頼性を検定する
第13回：内容分析のデザインと実践6（チームワーク）：コーディング結果を集計するI／コーダへ依頼する
第14回：内容分析のデザインと実践7（チームワーク）：コーディング結果を集計するII／レポートにまとめ
る
学期末：成果を発表する：レポートの提出と発表（15週目にゼミ発表会）

教科書 Textbooks

必要に応じて授業内で提示

参考文献 Reference Books

- 必要に応じて提示。以下、参考まで：
- 有馬明恵『内容分析の方法』（ナカニシヤ出版、2007年）
クラウス・クリッペンドルフ『メッセージ分析の技法-「内容分析」への招待』（勁草書房、1989年）
ダニエル・リフ他『内容分析の進め方』（勁草書房、2018年）
田崎篤郎・児島和人『マス・コミュニケーション効果研究の展開（改訂版）』（2003、北樹出版）
竹下俊郎『メディアの議題設定機能—マスコミ効果研究における理論と実証（増補版）』（2008、学文社）
佐渡島沙織・吉野亜矢子『これから研究を書くひとのためのガイドブック』（2008、ひつじ書房）
戸田山和久『論文の教室』（日本放送出版協会）

評価方法
Evaluation

	割 合 (%) Percent (%)	評 価 基 準 Description
試 験 Examinations	0%	試験は行いません。レポートを実施しない場合にのみ代替として検討します。
レポート Papers	30%	20--40%。半期ごとになんらかのまとめをおこないます。最終的に調査・分析の結果あるいはその進捗状況をレポートおよび発表資料にまとめたうえで発表します。その際の提出物、発表内容、貢献度で評価します。
平常点評価 Class Participation	55%	50--70%。授業への参加態度、課題・分析への取り組み、チームへの貢献をもとに評価します。各自が目的を持ち、主体的・協調的に作業することを重視します。
そ の 他 Others	15%	10--20%。ゼミの運営や行事に協調的にかかわる活動を評価します。また、上記以外で特筆すべき事項、推奨履修科目の学習状況等も、ここに計上します。

備考・関連URL
Note・URL

<https://semi.on-w.com/>

https://twitter.com/nakamura_semi

研究は主に、学生であるみなさん自身が次までの課題を決めて宿題を持ちより、メンバーと議論しながらチームで協調的に作業することによって進めます。理科といえば「実験」のようなもので、机上で考えるだけでなく、ポジティブなコミュニケーションで人と協働しながら手を動かし、自分なりのデータを分析してみたいという方に向いています。これまでの主題例は最新のものも含めて関連URL記載のサイトから見ることができます。

あなたはPCやプログラミングに習熟している必要はありません。苦手な方でもできる内容をこころがけてデザインしています。逆に、RやPythonでプログラミングをしたい方にはサブゼミ・卒論で個別に指導することも可能です。

ゼミ全体の流れは次の通りです。(1) まず、内容分析を使ってどういった研究ができるのかをプレ演習から演習Iにかけて学びます。同時に、プレ演習では内容分析の体験をします。(2) 演習Iではヒューマン・コーディングの手法を学びながら、それを用いた調査プロジェクトをチームごとに実演します。(3) 同様に、演習IIではコンピュータ・コーディングの手法を学びながら、それを用いた調査プロジェクトをチームごとに実演します。(4) 演習III～IVでは、卒業論文の作成を前提に進めます。ここではチーム内で主題を共有しながら、そのもとで一人ひとりが独立したプロジェクトに取り組みます。たとえば原発報道というチーム主題のもとで、あるものは新聞に取り組む、あるものはTVに取り組む、などです。それらの結果を卒業論文にまとめ、年度末に報告します。(5) 演習I～IVにかけては、並行して前後いずれかの時間にサブゼミを実施します。その中では、チームワークの補填をしたり、マス・コミュニケーション理論とジャーナリズム史、R、論文執筆法、エクセルの使い方、コンピュータ・コーディングの詳細、データ分析法といった基礎スキルを学んだりします。(6) また、各学期に2度ほど、サブゼミの時間にメディア・職業人ワークショップをおこないます。

春学期、秋学期演習とも、第15週に発表をおこないます。